第２　教育研究団体の意見・評価

○　全国歴史教育研究協議会

（代表者　髙野　修一　　会員数　約16,200人）
ＴＥＬ　042-582-2511

１　前文

今年度の平均点は 62.29 点で，前年度（56.99 点）と比べて 5.3 点上昇した。いずれの大問においても，高等学校における学習活動の流れを想定した場面が設定されており，多様な資料を活用した生徒の発表や議論などを意識した作問であった。大問の最後には一連の学習活動を振り返ることを意識した設問が用意されていたのも，そうした作問の姿勢を示すものである。

以下，『歴史総合，日本史探究』の試験について検討した結果を述べる。

２　試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

設問数は大問６題，小問 33 題であった。出題範囲は縄文時代から平成期（2010 年代）までを含み，全体を通して多様な資料を用いた設問が多くみられ，前年度と同様，生徒のメモやノートを活用する点で，高等学校における探究的な学びを意識した作問が見られた。

出題形式別でみると，正誤問題が８題（うち正文判断が６題で誤文判断が２題），正誤組合せが７題，語句組合せが４題，年代配列が１題，正文組合せが４題，用語（事項）と事項または説明の組合せが８題，複数の正答が存在するものが１題と，多岐にわたった。前年度と比べて，正誤問題がやや減少し，正誤組合せ・語句組合せが増加した。旧課程（『日本史Ｂ』）でよくみられた年代配列は１題のみであった。出題形式が多様であることについては，問題文をよく読み，与えられた資料や情報を活用して解答を選ぶための思考力・判断力が求められたといえる。

時代別では，時代横断型の出題が９題と多く，各時代の具体的なトピックを通じて日本史の展開を理解しているかどうかが問われた。時代区分としては，重複も含めて，縄文時代が２題，弥生時代が１題，飛鳥時代が２題，奈良時代が２題，平安時代が４題，院政期が３題，鎌倉時代が４題，室町時代が１題，戦国時代が１題，織豊政権期が４題，江戸時代が７題，明治期が３題，大正期が２題，昭和戦前期が３題，戦後史が５題であった。前年度に比べ，室町・戦国時代及び幕末～大正期の出題が減少し，戦後史の出題がやや増えた。「歴史総合」のパートは近現代史から出題されるため，「日本史探究」のパートにおける比重が下がることは理解できるが，高等学校で用いられる日本史探究の教科書において近現代史の割合が膨大であることを考えると，前年度程度の出題があってもよかったのではないか。

分野別では，複数の分野にまたがる出題が 10 題で，分野を横断する知識・理解が求められる設問が目立った。分野ごとにみると，政治が 13 題，社会経済が 14 題，軍事外交が５題，文化が３題であった。前年度に比べて政治分野の出題が目立ち，軍事外交及び文化の出題が減少した。以下，詳細をみていく。

第１問は，災害の歴史に関する生徒の活動を題材にした出題で，二つのパートで構成された。

Ａは災害の要因や開発との関係について考察を行うという場面設定である。

問１は正文選択問題で，主に大西洋三角貿易に関するもの。パネル内の情報整理を通じ，資料活用や，思考判断力が生かされた問題。「コロンブス」は歴史総合が想定している時期から外れている。

問２は正しい語句の組合せを選ぶ問題である。19世紀末～20世紀初頭が帝国主義の時代であること，下関条約で日本が台湾を清から獲得したことがわかれば容易に正答できる。誤文の「第三世界の台頭」は，教科書によって記述が異なる点に配慮があってもよかったであろう。

問３の⑴⑵は「インドの飢饉」と「エチオピアの飢饉」のパネルを用いた出題で，⑴は正誤の組合せ問題，⑵は⑴の内容を踏まえて資料を読み取る正文選択問題。パネルの情報を読み取らせるなら，資料から考えうる「問い」やそれを補強するための資料を選択させる出題も考えられよう。

問４はチョルノービリ（チェルノブイリ）原子力発電所事故に関する語句の組合せ問題。同事故とソ連解体との前後関係を年代のみから読み取らせることは，安易な暗記の助長が危惧される。地図中に国名を併記して読み取らせたり，ウクライナの主権回復などの情報から「独立国家共同体」か「ソ連」か，を考えさせたりする問題もあり得ただろう。

Ｂは災害への対応や，災害後の社会について考察を行うという場面設定である。

問５は産業革命に関する正文選択問題で，資料の読み取りと知識との両方が求められた。史資料の読み取りに終始しないよう，読み取りと知識が両方必要な選択肢で揃える工夫もできたであろう。

問６は関東大震災後の復興支援金に関する正文組合せ問題。グラフの内訳を読み取らせるのであれば，その背景や関係性などを思考させる，もしくは促すような問いが設定できたであろう。

問７は正しい語句と正文の組合せ問題。「歴史の扉」の資料活用に関連する出題で，東日本大震災までが扱われた。表２からの読み取りは文章の間違い探しにとどまっているので，各史料ネットの活動内容や現状を材料に，資料保全の在り方などに考察が及ぶ設問とするなど工夫できたであろう。

第２問は，日本の漁業の歴史について生徒が調べた内容に関する問題であった。問１は江戸時代後期に描かれた地引網漁の図（『上総九十九里地引網大漁猟正写之図』）に関する正誤問題である。網漁の技術が伝播した経路，干鰯の需要との関わりなど，江戸時代の産業や流通などに関する基本的な理解が求められた。問２は，地引網漁を行っていた網元の事例を調べたノートを資料として，その内容を整理した図の空欄補充問題である。網子が担っていた労働の内容（網を仕掛ける，網を引く）について判断させる空欄ア・イについては，歴史の設問としてやや違和感があった。空欄ウ（三百貫文）は資料の読み取りの要素が強い設問なので，空欄ア・イについては，九十九里の地理的な位置を選ばせる地図問題にするなど，知識・理解を問う出題にすることも考えられるのではないか。問３は，網漁に不可欠な錘（おもり）について調べたノートや図を資料として活用する正誤問題であった。①は「貝塚」という用語をあえて使わない形式で，単なる用語の暗記ではなく，その内容を理解できているかを問うという点で好ましい。だからこそ，②においても「丸木舟」の語を用いないほうが良かったのではないだろうか。問４は，鎌倉時代の荘園に関する資料と漁業を結びつける出題である。荘園から納められる年貢と産業のありようを関連させて，当該期の歴史像をとらえさせる良問であった。問５は，日本の漁業について調べたことや考察したことをまとめたノートに関する正誤問題である。縄文時代の漁労や江戸時代の身分社会についての基本的な知識と理解が求められた。鎌倉時代の荘園の資料から，漁獲物を加工して運びやすくしたのではないかという仮説は資料の分析として面白く，設問に組み入れることも可能だったのではないか。

第３問は，「歴史と資料」というテーマで絵画資料の読み取りに挑戦する生徒の会話文を用いた出題であった。

問１は，『伴大納言絵巻』の一場面を素材にした会話文の空欄ア・イに適する語句の組み合わせ問題である。空欄アについて，「図中の一行の装備」から検非違使と判断する会話文は，正答を選ぶのに支障はないものの，やや理解に苦しむ。先生の発言であることを考慮に入れたとしても，そのように判断できる根拠についてもう少し丁寧に説明を加えたほうが受験者に親切だったのではないか。あるいは，検非違使という用語を空欄にした設問も成り立つであろう。

問２は，藤原氏の人物（藤原良房）の事績に関する組合せ問題である。藤原氏の人物の説明については，あえて歴史用語を用いずに肢文が作られており，内容理解を問う良問である。平安時代の前期における藤原北家の発展について，基本的な知識と理解が求められた。

問３は，古代の政治的転換の契機となった出来事とその理由を選択する問題である。与えられた政治的出来事のどちらを選んでも，それぞれに対応する正文があり，古代の政治史に関する基本的な知識と理解が求められた。この設問においても歴史用語を伏せたかたちで選択肢が用意されているので，単なる用語暗記では対応できない，知識・理解を問う良問であった。

問４は,『伴大納言絵巻』について二つの資料から考察したメモに関する正誤問題である。絵巻が主題とする応天門の変が起こった９世紀，絵巻が成立した 12 世紀，与えられた資料（『看聞日記』）の成立した 15 世紀と，設問を解くためには重層する年代を整理して思考する力が求められた。

問５は，文字資料と絵画資料を活用して歴史を考える作業の中で生じた疑問と考察についての組合せ問題である。学習のまとめを行うという設定は，実際の授業場面を想定する共通テストらしい，主体的な学びを意識した設問である。ただ，この大問のテーマから考えると，疑問「あ」で『古事記』『日本書紀』を取り上げるのはやや唐突である。問１で，応天門の変に関して『日本三代実録』の記事をまとめていることと関連がないわけではないが，それでも違和感は残る。改善案としては,『古事記』『日本書紀』を取り上げるのではなく，律令国家の正史（六国史）の性格を問う設問にすることが考えられる。

第４問は，中世における女性と政治との関わりをテーマに行った探究学習についての出題であった。

問１は，北条政子の評価に関する正誤問題である。後世の資料（『愚管抄』,『樵談治要』）をもとに，それぞれが北条政子をどのように評価しているのかを読み取らせる，資料活用の良問である。

問２は，日野富子の評価が従来と現在とで変化したことに関する正誤組合せ問題であった。問１と同様に資料を活用している点は評価できるが，現在の研究における評価について生徒のノートにすべての情報をまとめてしまうのではなく，資料の読み取りを求める要素があればなおよかった。

問３は，鳥羽上皇の娘である八条院について，生徒が調べて議論した内容に関する組合せ問題である。空欄アについては，八条院の所領が生涯を通じて大きく増えたという前文のあとに続く内容として,「多くの資産を持っていた」という文を選ばせるのはやや安易ではなかったか。誤文が「開発領主であった」となっているので,「多くの資産を持っていた」とするよりも「領家や本家であった」などとするか，八条院領がのちに大覚寺統の基盤になったことに関連させて，大覚寺統に関する設問でもよかったのではないか。

問４は，鳥羽院政期の政治や社会に関する組合せ問題である。選択肢Ｘに「領域型荘園」の語が使われているが，この用語は近年の荘園史研究の進展に応じて注目されるようになったもので，高等学校の日本史学習において充分に定着しているといえるか，やや疑問がある。現状では「領域型荘園」の語を採用していない教科書もあるため，たとえば本問においては用語を伏せたかたちで,「一定の領域を含みこむ荘園が各地にみられた」といった説明にするなどの工夫があるとよかった。

問５は，女性が政治に関わることに対する江戸時代の考え方を調べてまとめたノートの内容や，江戸時代の女性に関する正誤問題である。江戸時代の女性というテーマ設定は興味深く，与えられた資料の情報を読み取る力が求められるとともに，江戸時代の社会に関する基本的な知識や理解を問う良問である。

第５問は，生徒たちが近世の城郭に着目して調べたノートに関わる出題であった。問１は，織豊政権期の国内情勢に関する正誤問題である。当該期に関わる基本的な知識や理解が求められた。問２は，桃山文化の一般的な特徴と具体的な歴史事象を結びつける出題である。選択肢Ｗの濃絵，Ｘの友禅染については，文字情報ではなく図版を活用することが望ましい。高等学校における文化史の授業においては，文化財の鑑賞を通じて理解を深めることが一般的であるため，そうした学習の成果をはかるためにも図版の活用を期待したい。問３は，大名の城郭を統制する幕府法令に関する組み合わせ問題である。大名家に伝来した文書の内容を読み取り，資料の性格や関連する別の資料の内容を判断させる良問である。問４は，城下町の平面的概念図を用いた正誤問題である。一般的な城下町のあり方について基本的な知

識や理解が求められた。問５は，城や館の歴史についてまとめた内容に関する正誤問題である。①・③・④は「城」に関する内容であるのに対して，②のみが「館」に関わる内容であることにやや違和感がある。②も「城」をテーマに，古代の東北における城柵を取り上げることや，中世の山城を取りあげることが考えられる。あるいは，選択肢のうち２つを「城」，２つを「館」に関するものとすれば，バランスが取れたのではないか。

第６問は，近現代日本における政治的リーダーシップについて，生徒たちが考察した内容に関する会話文からの出題である。問１は，PKO 協力法の成立背景に関する組合せ問題であった。1990 年代の政治や外交のあり方について，基本的な知識や理解が求められた。問２は，1950 年代後半の政党に関する風刺漫画と高度経済成長期の出来事に関する組合せ問題である。風刺画の示す内容を考察させる良問で，思考力・判断力とともに，自由民主党と日本社会党による 55 年体制についての基本的な知識や理解が求められた。問３は，首相と軍部の対立事例に関する並べ替え問題である。「首相と軍部の対立事例」という条件からするとやむを得ないのかもしれないが，やや扱う範囲が狭い（Ⅰ二・二六事件，Ⅱ東条英機内閣の成立，Ⅲ満洲事変）。当該期の政治・外交の動きを問う出題としては違和感がないものの，もう少し時間の幅を広げ，1920 年代の協調外交から戦時期への転換を扱う設問にしてもよかったのではないだろうか。問４は，『原敬日記』を調べてその概要をまとめたノートに関する空欄補充と，ノートに関して述べた文の正誤判定との組合せ問題である。近代政治史の学習において軍部大臣現役武官制の理解は重要であり，それを設問に取り上げることは評価できるが，ワシントン会議に際して原首相が海軍大臣の事務を管理したという事実は詳細にわたる内容である。したがって，そのことが「新例」であるとする理由を問う出題は，思考力をはかる点では良いが，知識・理解の面でやや難しい。誤文をもう少し判別しやすくしてもよかったのではないか。問５は，首相のリーダーシップや内閣の運営に影響を与えた組織や人物について考察した内容の正誤問題である。近現代を通観するという設定は，学習指導要領の内容に即したものであり評価できる。選択肢も明治・大正・昭和戦前期・占領期に及び，通観という表現にふさわしい内容になっている。

３　総評・まとめ

現行の学習指導要領のもとでの共通テストも２年目となり，前年度から引き続いて，生徒のメモやノート，地図，グラフ，図版，模式図，表，風刺画など，様々な資料の活用を求める出題で，分量や範囲はバランスの取れたものであった。解答するために必要な知識・理解はいずれも基本的なものが多く，全体としてみれば学習到達度をはかる適切な難易度であった。ほぼすべての設問において，資料を読み解く力と歴史的事象に関する知識・理解の両方を組み合わせて判断させる出題が目立った。知識・理解と思考・判断の両面を問おうとすれば，こうした出題になることは当然ともいえるので，同様の傾向が今後も続くのであろう。

生徒のメモや会話文など，探究学習の場面や学習の振り返りを意識的に取り入れている点も前年度から継続し，こちらは高等学校で授業を構成する際の一助になるだろう。

資料の読み取りを求める出題のうち，一部の問題でやや安易とみられる出題や，日本史の学習成果を試す設問として必ずしも適切とは言い切れない出題もみられた点については，次年度以降の改善を期待する。

出題分野に関しては，政治分野及び社会経済分野の設問が目立つのに対して，外交や文化の領域の出題が少なく，ややアンバランスだったので，各分野がある程度均等になる出題をお願いしたい。